

## 樽前山1874年火口を見たイザベラ・バード

宮坂 省吾

イザベラ・バード (1831-1904) は日本の旅の目的地の一つをアイヌの拠点集落・平取と定め、横浜から東北を通して函館に上陸した。東京から平取まで陸路で約1400キロ、室蘭港からは馬で移動し、平取のアイヌ・コタンでの3泊4日にわたってアイヌのすべてを学び知ろうと全力を注いだ。(以上はウェブnippon.com金坂清則「イザベラ・バード」による。)

彼女は、平取からの帰路に訪れた自然のままの樽前山と「蝦夷の地形」を観察した。その記録『Unbeaten Tracks in Japan』は1880(明治13)年にロンドンで出版され、樽前山が広くヨーロッパに紹介されるきっかけになったという(竹馬敏廣、『樽前山』1979)。

筆者は、石川俊夫氏が序文を寄せた同書の一節「イザベラ・バードの樽前紀行」で彼女の樽前山行を知った。その後の文献探索により、彼女が樽前山の1874年火口を最初に観察したのではないかと考えるようになった。

そこで、バードの樽前山行の行程と観察対象に関する検討結果を2015年に日本地質学会北海道支部例会で講演した。それは6年後の電子ジャーナル『総合地質』5巻1号(2021年10月20日)に掲載された。関係の皆様には深い謝意を表するものである。

全2巻本の『Unbeaten Tracks in Japan』は金坂清則氏によって『完訳 日本奥地紀行』(2012-2013)として出版された。彼は「希代の旅行家バード」へと展開する基点が1878(明治11)年の7カ月間の日本の旅とその記録にあったと述べている。同時に、白老での記録は樽前火山研究のはじまりを飾るものとなったと言えるのではないだろうか。

今回『総合地質』誌に投稿した拙文はイザベラ・バードが地質学の分野でも足跡を残したことを指摘するものである。皆様に一瞥いただければ幸いです。(HRCG正会員)



(<https://www.nippon.com/ja/Japan-topics/g00829>)

## 第2回HRCG野外観察会「藻南公園」報告

関根 達夫

2021年10月16日13:00~15:00藻南公園に於いて野外観察会を開催しました。参加者(敬称略)は、木村則子、星野フサ、高田忠彦親子、宮坂省吾、中川充、岩間唯史、荒川昌伸の皆さんと、案内者の関根達夫、岡孝雄、嵯峨山積の計11名でした。観察会後半では雨が降りましたが、無事終わることができました。参加費は無料でした。

3年前の2018/10/18に水中火山岩研究会の見学会をこの藻南公園で開催し、山岸宏光さんに水冷破碎岩の解説をしていただきました。今回、藻南公園を見学地に選定したのは、今年の6月4日に亡くなられた山岸さんを偲ぶ思いも込められています。

藻南公園から石山にかけての地質は、札幌の地盤がどのようにして作られたかを知るのに最適なルートと考えています。今回の参加者は、地質の専門家ばかりなのであまり詳しい説明はいらなと思いますが、今後、HRCGとして、市民向けの見学会を開催することを想定して案内書を作りました。

主な観察ポイント

- ① 支笏火砕流  
溶結部と非溶結部。溶結凝灰岩のでき方
- ② 藻南橋から基盤(水冷破碎岩)の構造と支笏火砕流との境界
- ③ 段丘面と段丘堆積物。水冷破碎岩の上位に発達するT4段丘\*堆積物を観察  
\*豊平川沿いの河岸段丘の一つで、最下位の段丘面
- ④ 扇状地札幌面と平岸面を干涉標高図で説明
- ⑤ 基盤の水冷破碎岩と偽枕状溶岩、岩脈の観察
- ⑥ 泥岩と水冷破碎岩の境界面付近のスランピング構造\*の観察  
\*堆積物が、固化しないうちに海底などの斜面を滑り落ち、不規則に乱堆積してできた構造
- ⑦ 泥岩分布地の落差約5mの滝の観察  
(ウラ面に続く)



第2回 HRCG野外観察会・藻南公園  
2021/10/16



水冷破碎岩と支笏火砕流堆積物の境界 (②地点)

案内書作成にあたり、『総合地質』3巻1号（2019年9月）31-55p, 岡孝雄・古沢仁・岡村聡・青柳大介・重野聖之「豊平川沿いの新第三系層序, 藻岩山の形成史および小金湯産カイギュウ化石」を参照しました。露頭説明のためにハンディメガホンにショルダーメガホンに改造して使用しました。

(HRCG理事)

## 新入会員の声

札幌市博物館活動センターで学芸員をしています。専門は「古生物学」で、特に海生哺乳類といわれるクジラやカイギュウの化石を研究しています。

現在では、両者は生まれてから死ぬまでを水中で過ごす動物ですが、両者とも今からおよそ5300万年前ころ、北半球のローラシア大陸と南半球のゴンドアナ大陸の間に開けたテチス海に陸から進出した哺乳類です。

クジラは動き回る動物を、カイギュウは植物を餌としました。クジラは地球環境が変動すると、機動力を生かし多様な餌に適応した進化を遂げ、カイギュウの多くは自らが好む植物を変えず、水生植物の変動に応じて浅い海をゆっくり移動しました。

私は、どちらかといえば“カイギュウ的”人間かな…(?) ということで自己紹介とさせていただきます。

## 古沢 仁



タキカワカイギュウの発掘（1980年, 空知川）。私のカイギュウ研究のはじまり

## 総合地質の継続と発展のために 宮下純夫

総合地質第5巻が発行されました。今回は掲載が10件にも上り、多彩なジャンルの原稿が掲載されています。山岸宏光会員の追悼ページでは、同会員の多彩な活躍がしのべられます。今回、報告・資料として掲載されているものは、市民向けの見学会の際に用いた資料がベースになっています。今後も編集委員会では、そうした多様な資料・報告に関しても、柔軟に対応していきますので、ご相談ください。総合地質は君波編集委員長のもとで3巻まで編集されたのち、4巻目からは宮下が引き継ぐこととなりました。当初は電子版のみの発行でしたが、第3巻から印刷体も同時発行しています。また、書評なども掲載し、より豊かな雑誌となるように務めるつもりです。皆様からの多数の投稿をお待ちしています。

(総合地質編集委員長)

## 活動記録

- 8月30日（月） エルプラザ・ブース引越し（ロッカー2台借用）
- 10月16日（土） 第2回野外観察会（藻南公園）参加者11名
- 10月20日（水） 「総合地質」（第5巻, 116ページ）を発行
- 10月27日（水） 札幌市市民活動サポートセンター「事務ブース団体活動報告書」を提出
- 11月4日（木） 幹事会（オンライン）

お知らせ：本通信は以下のURLにも掲載されています  
<http://www.hrcg.jp/notice.html>

## 会員紹介・会員短信



一般会員  
東 豊士

相変わらず日高山脈博物館にいます。コロナ禍において、博物館の臨時休館、事業の中止、野外調査・研究の制限など、かなり危機的な状況ですが、唯一の学芸員として、できることを進めていきます。ご協力お願いいたします。



一般会員  
高田 忠彦

30数年前、本法人の岡理事の案内で出会った稚内層は、ナノサイズの細孔パワーを発揮し、空気と水を浄化します。稚内層を利用した機能性建材とセラミックスの事業をはじめ、環境ビジネスの難しさを痛感しています。生涯現役のつもりですので、よろしく願います。



一般会員  
平間 正男

退職してから26年になります。アルバイトも無くなり、今は何もしていません。コロナウイルス騒動で散歩もできず、足腰が弱ってしまいました。昨年、苗穂駅前のマンション工事現場から青色の粘土鉱物が見つかりました。恐らく藍鉄鉱だと思われま。

## 編集後記

毎回編集にあたって、寄稿くださった原稿にはできるだけ早く目を通し、なるべくHRCG通信に相応しい体裁をと心がけてきました。そのために時には字数制限、表現変更などで意に沿わない書き直しをお願いすることがあったかも知れません。幸いにも寄稿者の殆どは快く受け入れられ、編集作業も大過なく進められています。迅速を旨とするHRCG通信の定期的発刊を目指しますので今後ともご協力をお願いいたします。（高波）